

1. 奈良・平安時代の生産技術

前回の講座でお話したように、奈良・平安時代は現在の奈良県や京都府が政治の中心地となり、中国の都を手本とした藤原京や平安京などの都が整備され、地方は「国・郡・里(郷)」という単位にわけられ、それぞれ国府や郡衙と呼ばれる役所が置かれた時代であったと説明しました。

この時代になると、前代の古墳時代よりも国としての基盤が整い始めることから、様々な職業によって生計を立てる人達が登場し始めました。このように当時の人々が生活のために物を生産した遺跡を生産遺跡と呼びます。

生産遺跡の発掘調査がもたらすすばらしい点は、その場所でのどのようなものが生産されていたのかが一目で分かるという点ですが、その他にも未完成品の出土や生産技術に関する道具類の出土、また、生産段階で不必要となったものなどが出土することから、生産技術そのものを復元できるという最大の利点があります。こようにして集められた情報をもとに千葉県内の鉄や土器の生産の実態が明らかになってきました。

では、県内で生産された製品にはどのようなものがあるのでしょうか？第一に挙げられるのが、農耕技術の進展に伴って増加した鉄生産量とその技術的進歩です。古墳時代における鉄生産技術からは比較できないほどの大規模でシステマ的(鉄生産コンビナートと表現する研究者もいます)な鉄生産体制が整えられたことにより、農耕具の増加や武器生産の生産量が飛躍的に増加しました。

次に土器(須恵器)の生産が挙げられます。古墳時代の須恵器生産は畿内地方などでのみ行われており、生産していた人々も今の韓国などから日本に連れて来られた工人と呼ばれる人達が主でした。須恵器作りの方法が広く広められたことにより、千葉県内においても拠点的な須恵器生産の工房が各地に置かれるようになります。当初、これらの須恵器は国府や郡衙などの役所、お寺などで使用するために生産が行われたようですが、大量生産が行われるようになることから、一般の民衆にも広く行渡るようになります。



図1 千葉県内の生産遺跡など

この他特殊なものとしては「瓦」の生産が挙げられます。当時の建物の多くはまだ茅葺きなど、植物を利用して屋根を葺くものが殆どでしたが、お寺や、役所の建物には粘土を焼き固めて作った「瓦」が乗せられていたことが分かっています。印旛地域においては「瓦」の生産遺跡の発見がなくその実態が解りづらい状態でしたが、柴町の龍角寺に程近い山林の斜面から瓦窯が発見されたことから、龍角寺の造営に際して寺のすぐ近くで瓦が生産されていたこと、また、瓦そのものに「文字」が記されていたことから寺の造営に際して地域の有力豪族、または地域として「寄進」が行われていたのではないかとということが解りました。

このように生産遺跡を調査することにより、古代日本の技術レベルや、そこで生産された製品の流通範囲がどの辺りにまで及び各村々などがどのように結びついていたのかが解るのです。

2. 鉄作りと鉄器作り

奈良・平安時代の農耕の生産性の向上を支えた背景の一つとして鉄製農耕具の普及が急速に広まったことが推測されています。また、村から出土する鉄器の中には鉄鍔などの武器量が少なくないことも見逃すことはできず、古墳時代以来の軍事力が村に蓄えられていたことを物語っています。

さらに奈良時代になると、朝廷が東北地方への本格的な進出政策を採り始めることから、関東地方がその前線基地として機能し、武器の生産拠点を兼ね備えるようになったものと考えられています。

鉄づくりには「製錬」と「精錬」の作業があり、前者は砂鉄を燃料となる炭で溶かして鉄の塊を作る工程、後者はその塊から不純物を取り除き、成分の調整をして加工可能な合金を作る工程を指します。これら一連の作業が生産遺跡で行われていたかどうかについては出土した鉄の「屑」を分析することや、その他に出土する鉄生産にかかわる遺物を分析することによって復元することが可能となります。

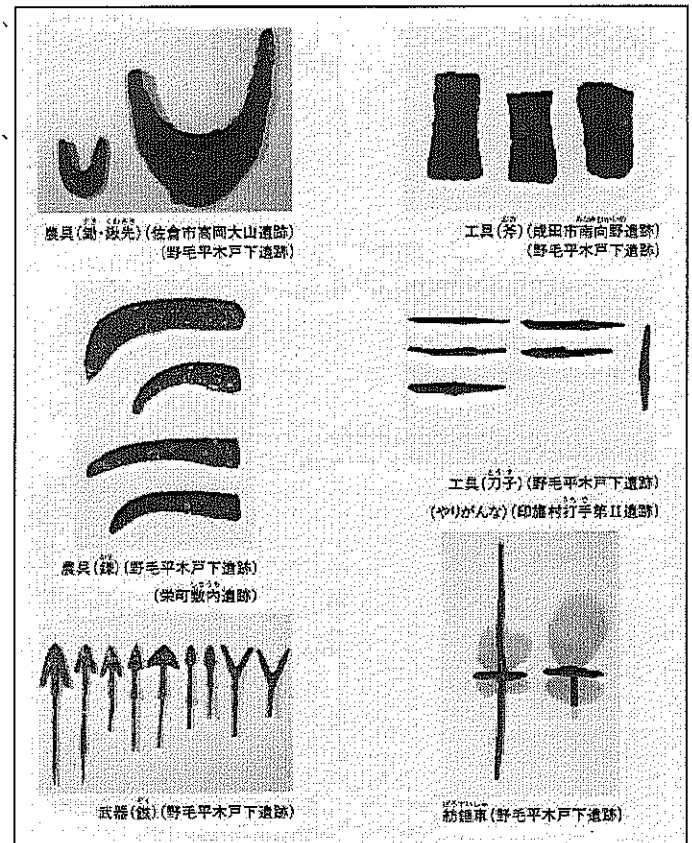


図2 印旛郡市内の遺跡から出土した鉄器類